

セッコクのプライマリー交配品種(その1)

夏井 高人

1 はじめに

日本を代表するラン科植物の一つとしてセッコク (*Dendrobium moniliforme*) がある (以下, 学名 *Dendrobium moniliforme* であるラン科植物を指す場合にのみカタカナで「セッコク」と表記することにする。)。野生のセッコクの中から採取・選抜された品種や人工交配によって作出された品種などが数多く流通しており, 初夏の少し前頃に綺麗な花を咲かせ, 良い香りを漂わせて人々の心を潤してきた。

セッコクやその近縁種の中には美しい斑模様や珍妙な芸を出すもの (個体変異) があり, その中から特に優れたものが選抜され, 古くは江戸時代から今日に至るまでの長きにわたり, 長生草 (長生艸) または長生蘭として愛好家の間で親しまれてきた。

今日, 野生のセッコクを目にすることは比較的難しくなっているが, 高度経済成長期のころまでは田舎の農家の屋根や庭木などに比較的普通に生えていたようで, 今でも奥深い山地の断崖等には自生のセッコクが生えていることがある。また, それが純粋なセッコクであるかどうかは別として, 昔からある神社の神域や寺院の境内などにある古木などでも石斛類の姿を目にすることができる。

他方で, セッコクは日本にのみ分布しているわけではない。植物分類学上の見解の対立があるので一致した見解というわけではないが, 広い意味でのセッコクは, 日本国の本州, 四国, 九州, 南西諸島よりもむしろもっと暖かい地域に広く分布しており, 中国, 台湾, 東南アジアなどにも自生がある。例えば, かつて広州

石斛として中国から輸入されたり交配に用いられたりした石斛類の中には、セッコクとして分類可能なものだけではなく、広義ではセッコク (*Dendrobium moniliforme*) に入るけれども分類学上の立場によっては別種である広東石斛 (*Dendrobium wilsonii*) などのように日本のセッコクとは少し特徴の異なる若干大型のものもある¹。また、東南アジア産のセッコク (*Dendrobium moniliforme*) は、日本産のものとも及び中国産のものとも少し異なる特徴をもっていることが広く知られている。

このように、そもそも「セッコクとは何か？」という一番肝心な点について、若干の問題はあるとはいえ、広い意味でのセッコクの特徴は共通のものとして認識されていると思われ、それゆえ、RHS でもセッコクという種が確定的なものとしてセッコクと他のラン科植物との人工交配種の登録を重ねてきた。現在、相当多数の園芸交配品種が登録されている²。

ところで、このようなセッコク交配種の RHS 登録を調べている間に、その交配の歴史が結構古くからあり、しかも、かなり多数の種類 of ラン科植物との交配がなされてきたという事実を知るに至った。あまりにも数が多いため、その全部を網羅的に調べることには相当の労力を要する。

そこで、セッコクと他のデンドロビウム属原種とのプライマリー交配としてどのようなものがあるのかについてだけ限定して調べてみた。次いで、日本の石斛園芸交配に非常に大きな影響を及ぼしたと思われる高貴石斛 (*Dendrobium nobile*) 及び鉄皮石斛 (*Dendrobium catenatum* (Syn. *Dendrobium tosaense*; *Dendrobium stricklandianum*)) に着目して、その主要な人工交配種について調べてみた。そして、その調査の過程の中でたまたま着目した園芸品種 (*Dendrobium Fukumusume*³) に着目し、原種に戻して考えると何種類の原種デンドロビウムの交配になるのかを追跡調査してみた。

以下、考察はほとんどなく、単に調査結果としての事実をまと

めただけだが、石斛愛好家の知識・教養のために何らかの有用性があるのではないかと考え、調査結果の一部を提供することにする。

2 RHS に登録されたセッコクのプライマリー交配品種

野生の植物（原種）と他の野生の植物（原種）とを交配して得られた雑種第一代の人工交配品種のことを一般にプライマリー交配（Primary hybrid）と呼んでいる。

セッコクにもプライマリー交配品種が多数ある。現行の RHS 登録では、交配親の記述として「種子をつくった親×花粉を提供した親」という形式で登録がなされているので、以下、交配品種の名前順でそのリストを示す（調査時点：2013年8月31日）。

記載事項は、交配品種名、交配親、登録者名、登録年及び異名登録（Synonym）がある場合にはその異名の順となっている。

Dendrobium Cassiope

Dendrobium moniliforme × *Dendrobium nobile*

N.C. Cookson, 1890

Dendrobium Chinsai

Dendrobium moniliforme × *Dendrobium unicum*

Sak. Takagi, 1981

*Dendrobium Hikaru Genji*⁴

Dendrobium moniliforme × *Dendrobium bronckartii*

H. Furuse, 1985⁵

*Dendrobium Ise*⁶

Dendrobium moniliforme × *Dendrobium stricklandianum*

H. Nishimura, 1972

*Dendrobium Aya*⁷

Dendrobium Ise × *Dendrobium moniliforme*

T. Nagasaka, 1985

*Dendrobium Kuganimaru*⁸

Dendrobium moniliforme × *Dendrobium seidenfadenii*⁹

S. Moriyama, 1988

*Dendrobium Kyokkoh*¹⁰

Dendrobium moniliforme × *Dendrobium anosmum*

H. Furuse, 1980

Dendrobium Monilitox

Dendrobium moniliforme × *Dendrobium chrysotoxum*

H. Furuse, 1982

Dendrobium Phloform

Dendrobium moniliforme × *Dendrobium subclausum*

T. Kasahara, 1997

Dendrobium Pixie Aya

Dendrobium moniliforme × *Dendrobium scabrilingue*

T. Nagasaka, 1985

Dendrobium Pukekura

Dendrobium moniliforme × *Dendrobium regium*

New Plymouth D.C., 2011

Dendrobium Santana

Dendrobium moniliforme × *Dendrobium friedericksianum*

J. Yamamoto, 1985¹¹

Dendrobium Stratius

Dendrobium moniliforme × *Dendrobium pulchellum*

Veitch, 1892

(Syn. *Dendrobium* Striatum)

Dendrobium Sunlight

Dendrobium moniliforme × *Dendrobium loddigesii*

H. Furuse, 1982

Dendrobium Veitchii

Dendrobium moniliforme × *Dendrobium wardianum*

Veitch, 1890

(Syn. Wardiano-Japonicum, Wardiano-moniliforme)

Dendrobium Aeneas

Dendrobium crystallinum × *Dendrobium moniliforme*

Veitch, 1893

Dendrobium Aoyama¹²

Dendrobium aduncum × *Dendrobium moniliforme*

Iwasaki, 1924

Dendrobium Endocharis

Dendrobium heterocarpum × *Dendrobium moniliforme*

Veitch, 1876

Dendrobium Isis

Dendrobium hercoglossum × *Dendrobium moniliforme*

E.S. Berkeley, 1901

Dendrobium Macjap

Dendrobium maccarthiae × *Dendrobium moniliforme*

N.C. Cookson, 1904

(Syn. *Dendrobium* Mac-jap)

Dendrobium Niitaka

Dendrobium Cassiope × *Dendrobium moniliforme*

Shimadzu, 1934

(続く)

[注記]

- ¹ 私見によれば、広東石斛 (*Dendrobium wilsonii*) は、日本のオキナワセッコク (*Dendrobium okinawense*) とほぼ同一の種類に属する植物と考えて差し支えないのではないかと思われる。
- ² 推測だが、江戸時代においてもセッコク及びその近縁種の交配が盛んになされていたものと思われる。ただ、残念ながら、日本には交配記録を残すという習慣がなく、それを命ずる法令もないため (種苗法に基づく品種登録は義務ではない。特定の品種に関する権利を確保し行使するためには品種登録が必要になるというだけのことなので、任意的な制度ということになる。)、江戸時代においてもセッコクの交配があったという事実を証明するための信頼できる文献資料等がない。
- ³ 「福娘」という石斛品種は、同名の品種が少なくとも2種類存在する。1つは紀州産の紅一点花「福娘」で、もう1つは佐賀県産の舌割れ花「福娘」。これら2つの石斛「福娘」のどちらかが

「*Dendrobium Fukumusume*」と同一の植物である可能性は否定できないが、その事実を確定するのに足りる資料はない。他方、RHS登録品と同一のものであるかどうかは判然としないけれども、「デンドロビウム・フクムスメ」という名の複数の園芸品種が流通している。そして、もしこれらのランがいずれもRHS登録品である「*Dendrobium Fukumusume*」とは異なる植物であるとすれば、RHSによる園芸品種登録管理の規則上では、いずれも違法な名称の使用ということになる。つまり、これらのランについては「福娘」または「フクムスメ」という名を使ってはいけないのに、事実上使われているということになる。

4 石斛「光源氏」との関係は不明。

5 長崎の医師古瀬光氏の業績については、長崎亜熱帯植物園花情報2008年1月号に簡単な紹介文がある。これによれば、古瀬氏は、長崎に稲佐山に自生していたセッコク他のラン科植物とを交配して約80種の園芸品種を作出したとのこと。

6 いわゆる「イセ」。なお、現在では、*Dendrobium stricklandianum* は *Dendrobium catenatum* の異名 (Synonym) とされており、キバナノセッコク (ホンセッコク) の旧学名である *Dendrobium tosaense* も *Dendrobium catenatum* の異名とされていることから、日本のキバナノセッコクとセッコクとの交配も「イセ」に含まれることになる。しかし、狭義で考える立場を前提とすると、中国産の鉄皮石斛 (*Dendrobium stricklandianum*) の花粉をセッコクの蕊柱に受粉して得られた交配品のみが「イセ」の名を冠することができるということになり、それ以外の組み合わせのものについて「イセ」の名を用いることは、RHSの登録規則上では全て違法ということになる。

7 石斛「綾鼓」、長生蘭「白綾」との関係は不明。

8 長生蘭「黄金丸」との関係は不明。

9 *Dendrobium seidenfadenii* は、*Dendrobium dickasonii* の異名。

10 石斛「極紅」との関係は不明。

11 「山本デンドロビューム」の園主である山本二郎氏を指す。

12 デンドロビウム・アオヤマは、小石川植物園の温室に保存されており、毎年2月ころになると交配親である *Dendrobium aduncum* の特徴を濃厚に示す花を咲かせる。